

野田川で石をひっくり返して魚を探す子どもたち。石についた泥が流されて、魚が食べるコケが育ちやすくなる

やばいっ！ つかまる場所だった。
石の下にかくれてたのに、人間は恐るべしだ。
ぼくはドンコ。野田川の住民さ。
何だか最近、川の中がきれいになった。
エサもいっぱいいて、仲間も増えてきた気がする。
子どもたちにつかまるわけにはいかないけど、
こうして石を転がしてもらって、
川の洗濯になるんだって。
どういうことかって？ 裏面に書いてあるらしいよ。
それではまた、野田川で会おう。

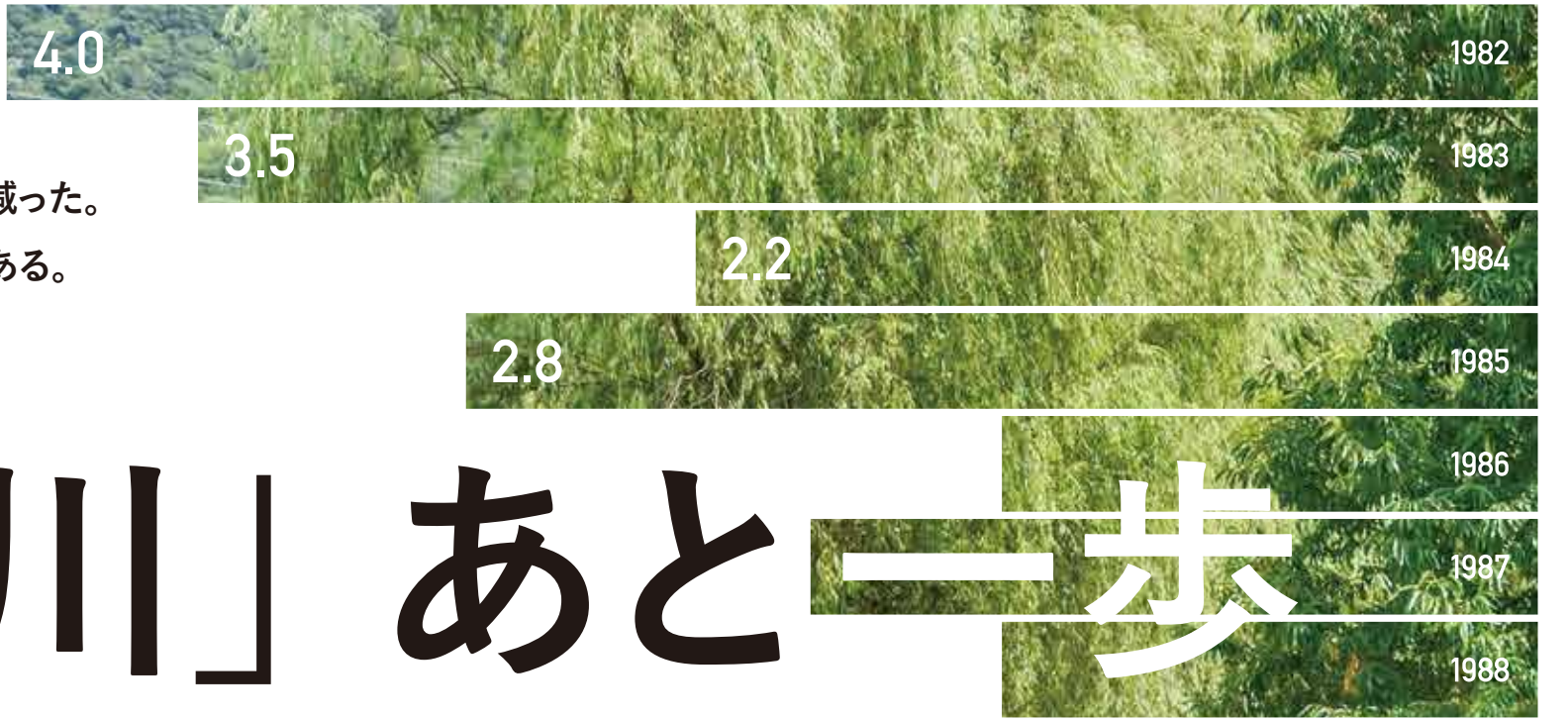
うちのまち

vol.09



TAKE ACTION
YOSANO BRANDING

野田川の汚れの量 堂谷橋 75%BOD[mg/L] → 汚れが少ない ← 汚れが多い



与謝野町は一つの川でできている。野田川だ。
流域は穀倉地帯。加悦谷平野を潤して阿蘇海へと流れ出る。
右のグラフを見てほしい。野田川の汚れは35年前の4分の1にまで減った。
そしていま、子どもたちの声が飛び交わせせらぎが、よみがえりつつある。
きれいになった野田川で、あなたも昔のように遊んでみませんか？

「清流野田川」あと一歩

宮津湾でとれたサケを、大喜びしながら触る和謝小学校の子どもたち (2015年撮影)



野田川で自然繁殖したとみられるシロザケの稚魚

汚れ激減 サケと子ども戻る

むくむくと入道雲がたちのぼった7月のある日、与謝野町後野の野田川に獲物を狙う子どもたちの声がした。「でっかいのがおる!」。加悦小3年の大江優美さん(9)は大きな石の下に魚の影を見た。網を構えて手で追い込むと、網が暴れた。手のひらよりも大きいアユだ。「めっちゃうれし!」。輝くアユを手に笑顔がはじけた。
野田川で遊ぶ「川の学校」が後野で始まったのは4年前。大江さんは毎年来ている。大物を手づかみしたら、もうやめられない。感想には「川の学校が毎日あったらいいな」と書いていた。加悦小2年の杉本大和君(7)は「もう一回やりたい。次はいつ?」と父和彦さん(45)を見上げた。和彦さんも小学生の時にナマズを釣って遊んだ。川の主のような大物を捕ったことは忘れられない。和彦さんは「自分が楽しかった体験を子どもにもさせてあげたい」と語った。そんな親子を見て、朝倉一博さん(68)は「川の学校を始めて良かった」と顔をほころばせた。

1300年前 平城宮にサケ献上

後野の人たちが川の学校を始めたきっかけは、野田川でシロザケが産卵しているのを毎日新聞で知ったことだった。川の近くに住んでいても知らない人は多く、実際に60センチを超える魚体が傷だらけになって卵を産む姿を見て「サケが帰る川を守ろう」という声が高まった。さらに調べると、1300年前の奈良時代には野田川から平城宮にサケを献上していたことも分かった。後野区民らはマイクロバスで奈良文化財研究所を訪ねた。そこには「丹後の国が與謝川(野田川)の生サケを天皇の食料として献上した」と記録した木簡(木の荷札)があった。当時の貴重なタンパク源。奈良の都で高級品として知れ渡っていたらしい。「うちのまちの宝物は野田川に眠っていた」。そう気づいた区民は昔のように川に入ろうと話

し合い、子どもたちに魚のつかみ方を教え始めたのだ。近くで稲作を営む山村義信さん(68)は子どものころ、一升瓶の底を切って魚を捕る仕掛けを作ったことを思い出した。「土手のウコ(穴)に手をつまみ込むと、ぬるるとするんだ。そっと手を広げて、ぐっとつかむ。そうやってでっかい魚を捕まえた」。話す顔はまるで少年のようだ。昔は水路で小さなフナがいくらでも捕れた。高度経済成長期にさしかかると、米の量産のために農業や化学肥料をたくさん使った。生活排水も流れ込み、気づけば川は汚れていた。川は田んぼに水を引くだけの用水路。遊ぶ場所ではなくなった。流域には水をせき止める堰が並び、「立入禁止」の看板が立った。幼少の頃、学校から帰るといつも川で遊んだ吉田元良さん(81)は、孫たちにも川で遊ばせてあげたいと願っていた。「60年かけてどん底まで川を汚したのは我々の世代だ。これから同じ時間をかけて美しい川を取り戻したい」。吉田さんは川の学校で子どもたちに語りかけた。「ご飯を食べた後も、どうか魚のことを思っほしい。何でも排水口に流さずちょっとふき取る。その気持ちを大切にしようね」
野田川の支流の岩屋川には3年前、京都市伏見区から3人の兄弟がやってきた。嶋さん家族だ。川は自宅から歩いて1分。長男の蒼蒼さん(13)は透き通ったせらぎに息をのんだ。川に入って遊んでもここには怒られない。次男の煌翔君(11)と三男の寿樹君(8)も水中メガネをつけて水に飛び込んだ。「冷たくて気持ちいい!」。近所の子も「何してるの?」と寄ってきて、エビや魚を捕るのに夢になった。近くに住む坂根義隆さん(42)はそれを見て懐かしく思った。父の畑仕事を手伝いながら、ここで魚を釣っていたのを思い出し、子どもたちに「酒団子」を作ってあげた。小麦粉を酒で練ってある。小さくちぎって釣り針につけ、よどみに流すとウキがスイーッと

沈んだ。「今だ! 合わせろ」。でも、初めての子はうまく釣れない。坂根さんは「ちょっと貸してみな」と竿を手にした。茂みに隠れて餌を落とすと……。見事に釣り上げた。子どもたちは大喜び。坂根さんは子どもに竿を返すのも忘れ「これはやめられん」と再びウキを見つめた。

川を耕せば 魚が育つ

岩屋川の阿知江橋近くは昔、収穫した野菜の洗い場だった。洗濯中のおばあさんがたらいでナマズをすくったこともある。水辺に降りる暮らしが残っていたおかげで、子どもの遊び場も保たれていた。しかし、今年7月の西日本豪雨は川を一変させた。山から流れ出た大量の土砂が、魚がすむ岩陰や淵を埋め尽くしたのだ。重機で砂が取り除かれるのを待つしかないと思いきや、市民の手で生き物のすみかをよみがえらせる方法があるという。川底に間伐材や土のうを並べて流れに強弱をつけることで、砂が運ばれて浅瀬と淵になるのを助ける取り組み。教えているのは、河川工学を応用して自然の回復力を高める「小さな自然再生」研究会。ロコミで全国に広がり、北海道や兵庫、福岡などで実践中だ。

川は洪水で生まれ変わるのをご存じだろうか? 雨で増水すると水の勢が増し、川底の石が押し流されて表面の泥が洗い落とされる。その結果、魚が食べるコケや水中の虫が戻ってきて、魚も増えていくというのが再生の仕組みだ。子どもたちが魚を捕るために石を転がすと、川には洪水と同じような効果が表れる。「川を耕す」ことで自然を再生させようというのだ。研究会メンバーの滋賀県立大准教授、瀧健太郎さん(流域政策)は「魚を捕る子どもが増えると砂がかき混ぜられて川底が耕される。親子で遊んで、魚がウジャウジャいる川にしませんか」と話す。琵琶湖に注ぐ川では間伐材の魚道で1000匹を超えるアユが遡上した。野洲市では住民らがスコップを手に川に入り、川底の砂に砂利を混ぜ込んでピワマスと呼び戻そうと試みている。フカフカで水の通りが良い川底にすることで、実際に産卵も確認されている。

与謝野町でも試してみようだろうか? ということで、うちのまちは11月3日に「生き物いっぱい川づくり講座」を企画した。瀧さんを講師に招き、午前10時から岩屋の上地会館に集まって岩屋川を歩き、午後1時から後野地区公民館で野田川について流域の皆さんと考

える。町外からも参加できる。無料。予約なしの参加も可能だが、町商工振興課(0772・43・9012)に予約すれば人数分の資料を用意する。



生き物いっぱい川づくり講座

2018年11月3日(土・祝) 参加費無料
10時~11時半 上地会館(与謝野町岩屋)
13時~14時半 後野地区公民館(与謝野町後野)
☎与謝野町商工振興課(0772・43・9012)

読者アンケート

「うちのまち」第9号をお読みいただきありがとうございます。ご感想や取り上げてほしいテーマなどを、はがき、メール、下のQRコードからアクセスできるアンケートフォームのいずれかでお寄せください。抽選で1名の方に「京の豆こみ5kg」をお贈りいたします。2018年10月31日消印有効です。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。メール・はがきの場合は、お名前、ご住所、電話番号、ご感想を明記の上、右下記載の与謝野町商工振興課までお送りください。



北海道の尻別川や熊本県の川辺川など、BODが0.5mg/L以下の川を、国は「水質が最も良好な河川」と認定している。その水質を維持している一級河川は、全国で16カ所しかない。野田川も堂谷橋0.8mg/L、六反田橋では0.5mg/Lをクリアしている。全国の清流に近い水質を保てるようになっているのだ。

府は同町石川の堂谷橋で川の汚れ具合を示すBOD(生物化学的酸素要求量)を測っている。河川の環境基準値の代表的なものとして、川の水1リットルに含まれる有機物などを、微生物が食べて分解するのに必要な酸素の量を示している。数が低いほど良く、2mg/Lというのが普通の浄水施設で浄化ができるレベルだ。70年代、野田川はその基準を超えていたが、だんだん下がって97年以降は基準を下回り始め、08年以降の数値は30年前と比べると半分以上になった。

京都市内の鴨川は87年に環境基準の5倍も汚れていたが、下水道が広がって96年以降は基準以下を保っている。一方、野田川の流域には広大な田畑がある。生活排水だけでなく、肥料や農薬が流れ出る川に栄養が増えすぎて汚れてしまうが、生産者の意識も変わりつつある。町農林課は「大量に肥料を入れてたくさん収穫するより、米の品質にこだわって適量を与える方が主流になった。ほとんどの農家が田んぼの水を流出させないように工夫している」と話す。

30年前の家の近くの「みぞこ」を思い出してほしい。食事時や洗濯機を回している時に排水が流れ、泡だらけになっていなかったのだろうか? 今はどうだろうか。排水口は下水道につながり、側溝は雨水が流れるだけになった地域が多いはずだ。下水道ができたのは与謝野町誕生前の旧3町時代。岩屋町では95年、野田川町と加悦町は96年に始動した。水環境が変わり始めたのはそこからだ。与謝野町上下水道課によると、生活排水を側溝に流さず、下水道や浄化槽を利用している町民は、合併直後の06年で46%。これが、11年後の17年には75%と実に30%近くも急上昇した。下水道や浄化槽につながった世帯は6500世帯を超え、側溝に流す家は2600世帯を切った。生活排水の垂れ流しが、11年で半分以上も減ったのだ。コップ1杯のラーメンの汁を、アユがすめる水質に薄めるには浴槽3杯以上の水が必要だと言われているから、これだけ垂れ流しが減ったら川がきれいになるはずだ。

近づく「最良の水質」 0.5以下